

支部設立の経緯と歩み

【北海道支部】

北海道支部は、昭和 11 年 7 月 4 日、北海道、樺太の同好の士を包含する北日本支部の創立によって始まり、北海道帝国大学農学部農芸化学教室に事務所を置いて講演会等の行事を主催してきた。初代支部長は三宅康次先生で、活動資金は本部交付金のほか、寄付金その他の収入によっている。

昭和 18 年から 22 年までの記録は詳でないが、昭和 23 年 9 月 18 日、中村幸彦支部長のもと、日本農芸化学会北海道支部として再出発することとなり、以後、春秋 2 回の学術講演会、特別講演会を開催して今日に至っている。

当初は、日本化学会北海道支部、日本ビタミン学会北海道支部との共催もあったが、日本土壌肥料学会北海道支部とは、昭和 25 年以降、毎年共催しており、昭和 44 年からは、広く、農学、農芸化学諸分野にわたるテーマのもとに、年 1 回のシンポジウムを続けている。また、隣接の東北支部とは、昭和 42 年から合同学術講演会を、ほぼ 3 年に一度、交互に世話役となって開き、交流を深めている。

昭和 31 年、日本農芸化学会の社団法人化に伴い、支部は同会会員のみの組織となったが、それ以外の広範囲にわたる北海道内同好の士をもって、同年、新たに北海道農芸化学協会を設立し、支部に協賛する形で学術講演会、特別講演会、シンポジウム等を共催している。

支部長：三宅康次(昭11~13) 半沢 洵(昭14~16)
高橋栄治(昭17) ? (昭18~22)
中村幸彦(昭23~24) 石塚喜明(昭25)
小幡弥太郎(昭26) 佐々木西二(昭27)
中村幸彦(昭28) 石塚喜明(昭29)
小幡弥太郎(昭30) 中村幸彦(昭31)
佐々木西二(昭32) 石塚喜明(昭33)
小幡弥太郎(昭34~35) 佐々木西二(昭36~37)
小幡弥太郎(昭38~39) 下村得治(昭40~41)
伊沢正夫(昭42~43) 小幡弥太郎(昭44~45)
佐々木西二(昭46) 伊沢正夫(昭47)
坂村貞雄(昭48~49) 高尾彰一(昭50~51)
藤野安彦(昭52~53) 江口良友(昭54~55)
水谷純也(昭56~57) 菅原四郎(昭58~59)
高尾彰一(昭60~61)

【東北支部】

東北地方での農学教育の中で、農芸化学科の設立を見たのは、明治 35 年に創設された盛岡高等農林学校の農学科第二部が大正 7 年になって農芸化学科に改められたのが最初であった。その後昭和 22 年になって東北大学に農学部が設置され農芸化学関係の教官陣容も充実してきた中で、戦後の食糧基地としての東北地区で産学協同のもとに農芸化学の発展と食品工業の振興を旨として仙台で月 1 回の農化金曜会が始められた。同農学部設置以前からあった農学研究も含め、仙台、盛岡、福島、青森の主として発酵食品関係会社の参加も得て、研究成果が出て来たところで農化金曜会を発展的に解消して日本農芸化学会東北支部を設立する気運が起こってきた。そのころ学制改革によって盛岡高等農林学校が岩手大学として設立されその初代学長となった鈴木重雄氏を支部長として昭和 24 年に東北支部が発足し、第 1 回の支部大会が同年 11 月 12 日に東北大学農学部で開催された。その後、山形、弘前両大学の農学部にも農芸化学関係の学科が設けられ、東北地方における農芸化学の活動は日を追って盛んになってきた。支部行事としての大会、例会は主として仙台、盛岡、弘前、鶴岡で行われ、その他食研新庄支所、宮城県立農業短大、岩手県醸造試験場、北里大水産学部、東北女子大などでも開催された他、農学部のない秋田県、福島県でもそれぞれ醸造試験場、郡山女子大などの援助で催されてきた。さらに関東支部との合同大会もあり、北海道支部との合同大会は 3~4 年ごとに既に 6 回開催されている。

会員数も発足当時は 100 名足らずであったが、37 年を経た今日では 460 名を数え、年 1 回の大会、2 回の例会の他シンポジウム、薊田ゼミ等過疎の東北でも十分に活動しているものである。

支部長：鈴木重雄(昭24~27) 有山 恒(昭28)
波多野 正(昭29~30) 岡本 勇(昭31)
高山幸二郎(昭32) 田町以信男(昭33)
藤原 彰夫(昭34) 小柳 達男(昭35)
波多野 正(昭36~37) 中西 武雄(昭38~39)
斗ヶ沢宣久(昭40~41) 柴崎 一雄(昭42~43)
志村 憲助(昭44~45) 玉利勤治郎(昭46~47)
辻村克良(昭48~49) 大矢富二郎(昭50~51)
松本達郎(昭52~53) 松田和雄(昭54~55)

高橋 甫(昭56~57) 金田尚志(昭58~59)
小田切 敏(昭60~61)

【関東支部】

昭和12年11月27日、鈴木文助を支部長として、東京支部が設立された。すなわちすでに関西、西日本、北日本等の支部が発足していたが、東北、関東、その他二、三の近県は何れの支部にも属していなかったため、これらの地方を一九として支部を創設する議が有志の間で起こり、昭和12年10月16日、鈴木文助を代表とする発起人会が開かれ、10月30日の本部常議会議を経て、11月27日、東大山上会議所において、発会式が開かれた。出席者52名。

第一回講演会は発会式当日に行われ、藪田貞治郎、辰巳忠次、林武、町田佐一の論文発表、川島四郎の綜説講演があり、以後毎月1回東大農学部において例会が開催されてきた。なお、昭和28年8月9日「東京支部」を「関東支部」に改めた。第一回支部大会が昭和34年11月1日宇都宮大で開催され、以来、日大、農大、茨城大、東大、山梨大、玉川大、東農工大、教育大、お茶大、新潟大、筑波大、千葉大、等広く関東各地で開催されるようになった。一方支部例会は次第に講演数が減少し、昭和50年代に入り、事実上廃止され、支部大会、支部シンポジウムがこれに代ってきた。

支部長：鈴木文助(昭12~13) ? (昭15~16)
坂口謹一郎(昭17~18) ? (昭19~23)
坂口謹一郎(昭24~27) 朝井勇宣(昭28~29)
住木諭介(昭30~31) 神立 誠(昭32~34)
桜井芳人(昭34~35) 舟橋三郎(昭36~37)
北原覚雄(昭38~39) 小原哲二郎(昭40~41)
上村光男(昭42~43) 外池良三(昭44~45)
松井正直(昭46~47) 岡本 奨(昭48~49)
小林達吉(昭50~51) 鈴木三郎(昭52~53)
相田 浩(昭54~55) 福場博保(昭56~57)
高橋 健(昭58~59) 小崎道雄(昭60~61)

【中部支部】

日本農芸化学会中部支部が設立されたのは昭和29年11月13日のことである。当日は安城市にあった名古屋大学農学部で設立総会が挙行され、奥田会長の挨拶、田村梯一名大教授の中部支部設立経過報告の後、支部会則の決定、支部常議員および支部長の決定、支部幹事の指名、六所文三氏の支部設立宣言が行われた。次いで斉藤道雄初代支部長の挨拶があり、祝電の披露で設立総会が終了し、中部支部が誕生した。中部支部は関西支部から

分離独立したもので中部支部の設立に関しては関西支部の片桐英郎支部長、中島稔幹事の尽力によるところが大きい。設立総会当日の中部支部第一回例会は関西支部第115回講演会にも当り13題の研究発表が行われ、第2回例会は関西支部との合同大会として昭和30年5月21日に朝日麦酒吹田工場で行われている。支部創立10周年記念講演会は昭和39年11月14、15日愛知県中小企業センターで、創立20周年記念講演会は昭和49年10月26、27日に静岡大学で、さらに30周年記念講演会は「バイオサイエンスの発展」と題して昭和59年10月20日名古屋東山会館にて盛會裡に行われた。30周年を記念してそれまでの講演会の記録が小冊子にまとめられ印刷発行されている。

中部支部会員は昭和61年4月現在1,254名、学会全体の約12%を占める。

支部長：斉藤道雄(昭29~33) 土井新次(昭34~40)
芦田 淳(昭41~43) 宗 像 桂(昭44~47)
佐藤 泰(昭48~51) 並木満夫(昭52~55)
後藤俊夫(昭56~57) 吉田 昭(昭58~59)
鶴高重三(昭60~61)

【関西支部】

日本農芸化学会関西支部が他支部に先駆けて創設されたのは昭和9年4月8日であった。支部創設の気運が盛り上ってきた背景には、当時農芸化学会が日本化学会より独立して(大正13年7月)、研究活動がますます盛んになってきていたことと同時に、京都帝国大学に農学部が開学され(大正13年)、農林化学科(戦後農芸化学科に変更)の小辻教授一大杉(土壌、肥料)、鈴木(生物化学)、志方(林産化学)、近藤(栄養化学)、武居(農産製造学)、片桐(醸酵生理学)一たちが研究活動に意気盛んで、得られた成果を1日も早く世に聞きたいとの熱意が満ち溢れていたことが挙げられる。すでに、昭和5年に支部創設の芽生えがあり、その母体である近畿農芸化学懇話会が同志社大学総長大工原銀太郎会長(土壌肥料学)の下、同年5月15日発足し、その後本会は昭和8年まで常時100名近い出席者の下に春秋年2回、計8回開催されている。この間、本懇話会を関西支部改変する旨の要望が高まり、非公式にはあるがたびたび支部設置に関して本部との意見の交換がなされていたようであるが、昭和8年11月14日武居三吉教授の上京に際し、東京帝大鈴木梅太郎、藪田貞治郎両教授および日本農芸化学会川瀬副会長、木原幹事に関西側のこの希望を表明、意見を求めたのが公式な第一歩であった。本部側はこれを受け、翌年4月の総会に本件を付議するとの

案を提示した。その後両者間に数回の意見の交換があった後、昭和8年12月19日の常議会にて本案が諮られ可決された。関西側は直ちに支部設立委員会を発足させ、関西在住（当時は、現在の滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山、兵庫、岡山、鳥取、香川、徳島、高知の他、富山、石川、福井、愛知、三重、岐阜を含んでいた）の正会員に賛意を問う一方、支部細則草案の作成に取りかかった。昭和9年3月20日設立委員会は大杉 繁氏を代表者として、賛成者名簿（127名）、支部細則草案を附して正式に本部に支部設立を願い出、同年4月8日の日本農芸化学会総会において本件は承認され、ここに関西支部の誕生となった次第である。この間、各先達のご努力はなみなみならぬものがあつたものと拝察され、心より敬意を表する次第である。

初代支部長には京都高等蚕糸学校長村松舜祐氏（大工原氏急逝のため）が就任され、昭和9年5月20日日本農芸化学会関西支部創立総会、ならびに武居三吉、伊藤武男、鈴木梅太郎氏による第1回講演会が、京大楽友会館で開催された。その後本講演会（例会および支部大会）は脈々と受け継がれ、昭和61年7月12日（土）には345回を迎えようとしている。この間、3,300題余りの一般講演、および400題余りの特別講演が行われるなど、本支部は歴代各支部長の下で活発な活動が続けられている。

支部長：大工原銀太郎*

〔初代〕 村松舜祐(昭9~10) 大杉 繁(昭11, 13~19)
近藤金助(昭12, 25~27) 武居三吉(昭28~29)
片桐英郎(昭30~31) 井上吉之(昭32~33)
館 勇(昭34~35) 奥田 東(昭36~37)
三井哲夫(昭38~39) 満田久輝(昭40~41)
小野寺幸之進(昭42~43) 緒方浩一(昭44~47)
中島 稔(昭48~49) 秦 忠夫(昭50~51)
千葉英雄(昭52~53) 森田雄平(昭54~55)
栃倉辰六郎(昭56~57) 山田秀明(昭58~59)
小清水弘一(昭60~61)

* 大工原銀太郎氏は本支部の前身近畿農芸化学懇話会の会長として昭和5年~8年まで御活躍、支部創設

と同時に支部長に就任の予定であったが急逝のため村松氏が初代支部長に就任された。

【西日本支部】

昭和11年4月1日、吉村清尚を支部長として、西日本支部が設立された。すなわち、昭和11年2月25日、支部設立有志の会合が行われ、西日本方面においても支部を設置し、もって本会の主旨に副い一層の活動を期することに一致した。同年3月2日、吉村清尚を代表とする発起人会（発起人31名）が開催され、148名に通知がなされ、同年4月1日、支部が発足した。

同年5月10日、九州大学において創立総会が行われ、農化臨時大会との合同で16題の演題が発表された。参加者107名。以来、年に数回の例会が開催され、初期には日本土壤肥料学会西日本支部および朝鮮支部との合同会も行われた。昭和19年12月の第31回例会後、例会は一時中断されたが、昭和22年6月再開され、現在に至っている。この間、毎年の例会のうちの1つは、支部大会として、広島女子大、広島工試、島根大、山口大、愛媛大、福岡女子大、佐賀大、長崎大、熊本女子大、熊本工大、宮崎大、鹿児島大、琉球大等、広く西日本各地で開催されるようになり、そのうちのいくつかは、関西支部との合同で行われてきている。また、昭和26年11月、九州大学において初めてシンポジウムが開催され、昭和40年頃からは、毎年シンポジウムまたは講習会が開催されるようになった。

支部長：吉村清尚(昭11) 湯川又夫(昭12~14)
? (昭15~22) 山崎何恵(昭23~28)
岩田久敬(昭29) 佐々木周郁(昭30)
岩田久敬(昭31) 大島康義(昭32~33)
山藤一雄(昭34~35) 阿久根了(昭36~37)
本江元吉(昭38~39) 和田正太(昭40~41)
船津勝(昭42~43) 阿久根了(昭44~45)
前川一之(昭46~47) 船津勝(昭48~49)
上田誠之助(昭50~51) 林勝哉(昭52~53)
江藤守絵(昭56~57) 林田晋策(昭58~59)
船津軍喜(昭60~61)